イロイロ花火

風紙文

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
イロイロ花火

【Ｎコード】
Ｎ０６０１Ｗ

【作者名】
風紙文

【あらすじ】
夏も終わりに近づく今日この頃、ひょっとしたら夏休み最後のイベントとなりうるかもしれない花火大会におとずれた、個々の数組による、思い出となった物語。

開始の3時間前

「いやいや～お待たせお待たせ」

「そんなに待ってませんよ」

「そう？　結構着るのに手こずったんだけどね～」

「ソレは……蓮華、ですか？」

「お、分かるのかい？」

「先輩好きですもんね、蓮華」

「まぁね～、どうだい？」

「似合ってますよ。緋凪先輩」

「そっかそっか、ならよし」

「けどどうしますか？　まだ、始まるまで時間があるみたいですけど」

「おやおや？　あたし達の日課をお忘れかな？」

「ということは……」

「その通りだよ鏡八くん！」

「まだ何も言ってませんけど、そういうことですか」

「そういうことさ、開始何時だっけ？」

「えっとですね……8時ちょうどです」

「後3時間ね、じゃあいつもどうりに行きましょうか！」

「はぁ……やはりこうなるんですね」

「さっそく、開始！」

開始の3時間前（後書き）

花火大会に訪れた一組の少年少女、彼らの日課とは――――

ＰＭ７：００……

「ったく……こんな日になにやってんのよ」
アイツったら、いきなり、『ゴメン！　急用思い出したから片付けてくる！　ここで待ってて！』
とか言って走って行ってしまった。
それから約二時間が経ち、帰ってくる気配が一向に無い。
ただ待ってる訳がなく屋台を見て回っていたけど、すでにアイツと一度回った後だったので真新しさの無い中であまり持たなかった。
しびれを切らしてアイツの携帯にかけてみれば――――
『ただいま電波の届かな所にいるか、電源が入っていな』途中で切ってやった。
多分、電源を切っているんだろう。
なぜそんなことをしているのか？
いったい急用とはなんなのだろうか？
そもそも、アイツから誘っておいてこの仕打ちがなんなのか……

そうよ！　まずそこに至るのよ！

急に電話がかかってきたかと思えば、『今日の花火大会一緒に行こう！』とか言ってきて。
……ま、まぁ、ヒマだったから一人でも行こうとは思ってたけど。
誘ってきたから仕方なく乗ってあげて、もとから着て行こうとは思ってたけどわざわざ時間かけて浴衣着て、遅れたら悪いからと思って集合時間の２０分前に行って……始まるまでの時間屋台でも見て

回っていたら……今に至る。

「あっちから誘っておいてなんのよもーーーーー！！」

周りに他の人が居るのも構わずに叫んだ。当然人の視線を浴びるが、少々すっきりした。

だが、まだ怒りは残ったままだ。こうなったらやけ食いでもして……

「やあやあ、そこの赤とんぼのお姉さん」

後ろから声をかけられた。赤とんぼとは、今あたしが着ている浴衣の模様———赤色の浴衣についた蜻蛉を見てのことだろう。

振り返り見ると、あたしと同じように浴衣を着た女のひとが立っていた。

紫色の蓮華がついたきれいな浴衣だ。着ている人も、あまり化粧をしていないようだけど、それでも同姓のあたしが見て、綺麗だと思えた。

「いったい何を叫んでいたんだい？」

まぁそうだろう。あれだけ大きな声で叫んでいたら心配もされる。

「大丈夫です、なんでもないですから……」

ただ、そんなことを他人に、まして見ず知らずの方に話せるわけがない。

「いやいや、なんでもなけりゃあんな大声で叫んだりしないだろうよ」

それはそうだ。

蓮華柄の浴衣を着た女のひとは胸を叩く。

「お姉さんに話してみないかい？　誰かに言えば、一人大声で叫ぶよりスッキリするかもしれないよ？」

「……」

「素直になれない彼への気持ち、見知らぬお姉さんが聞いてあげよ

うじゃないか」
「！？」
な、なんで、それを知って……い、いや、あたしはアイツのことなんてなんとも……
「図星だったのか、予想で言ってみたのだけど」
「うっ……」
こ、こうなったら、むしろ聞いてもらった方がいいかもしれない……

ＰＭ７：２３……

少し場所を離れ、あたし達は河川敷に来ていた。
ここも花火が見えることから人はいるが、屋台の立ち並ぶ場所よりは幾分か少ない、あちらの方が真下から見えて屋台が近いということで有名だからだ。
２人で河川敷に座り、あたしは先ほどあった出来事を女の人に話した。
「ふむふむ……あちらから呼び出しておいて、急用だとかで一人どこかへ行ってしまった、と」
「そうなんです」
「そりゃあ叫びたくもなるさなぁ」
「う……」
今考えたら恥ずかしく思えてきた。
「まぁ、その行動の意味、お姉さんには分からなくも無いね」
女の人は立ち上がった。
「え？」
河川敷を数歩降りる、座るあたしと立っている女の人との顔が同じ

高さになったところで立ち止まり、こちらを向いた。
「赤とんぼの浴衣を着た高校生くらいの女の子を見たら、こう伝えてくれと頼まれたのだよね」
女の人は、頼まれた伝言を、赤蜻蛉柄の浴衣を着た高校生のあたしに伝えた。
「では、あたしはこれにて失礼するよ。アナタのように、お姉さんにも待たせ人がいるのでね」
女の人は、ぴっと手を上げると、河川敷を一気に駆け上がり、そのままどこかへ言ってしまった……
「……」
まさかあの人、それを伝えるのがあたしだと分かっていて……

PM7：56……

伝言の通り、あたしは河川敷から少し離れた神社の境内に来た。
浴衣に草履という普段とは違う歩きにくい恰好で境内までの階段を上るのはかなり苦労したが、上り切った先に、伝言を伝えたという人物がいた。
「……アンタ、どういうつもりなのよ」
鳥居を抜けて境内の中央付近、急用とかでいなくなったアイツに近づいた。
「良かった。伝言が届いたんだね」
「まずそれよ、もしもあの人があたしの他にこういう柄の浴衣着た人に会ってたらどうしたつもり？　それに、伝言ならメールで十分じゃない。なんで見ず知らずのあの人に伝えたわけ？」
正直怒りが込み上げていたが、それを隠しつつ言いたいこと聞きた

いことを一気にぶつけた。
「メールは、なんか風情がないなと思って、それに大丈夫だよ。他に、赤い蜻蛉柄の浴衣を着た高校生みたいな人はいなかったから。後、もしもこの伝言が届いたら、これはもう運命だな、と思ってさ」
アイツは淡々と全部の質問に答えた。
「……ひょっとして、急に行っちゃったのって、それを調べてたの？」
「うん、それも一つだけど……」
そこで怒りを堪えられなくなった。
「そっちから誘っておいて何をしてるのよ！　他の人の浴衣の柄見て回ってたり！　こっちが連絡しても出ないし！　見ず知らずの人に伝言頼んだかと思えばこんなところにいたり！　心配して損したわよ！　これならさっさと帰っちゃえばよかったんだわ！　他の人の浴衣を見えて回ってるような変態はほおっておいて！」
怒りにまかせて隠していた言葉をぶつける。するとアイツは顔を下げて悲しそうに、
「……ごめん。そんな気持ちにさせるつもりはなかったんだ。ただ、こうでもしないと、勇気が出なくて、ちゃんと言えないと思って……」
「もし逆の立場ならこんな気持ちになるってわかるでしょ！　なにが勇気よ！　何がちゃんと言えな……」
言葉の途中で、花火の上がる音がした。

「――――――」

パーーーーーーーン！！

「……え？」
花火にまぎれてアイツが何か言った。
よく聞こえなかった、という風に訊ねると、再び花火の上がる音。

「――――――だ。――――――」

パーーーーーーーン！！

再び花火の音にまぎれたアイツの声。
けど、今度は、ううん、今度もちゃんとあたしの耳に届いた。
「いきなりで、驚いてるかもしれないけど、返事は……こ、この花火大会が、終わってからで、良いから……」
花火が移ったように顔の赤いアイツがあたしの真横に立った。自分の顔をあまり見せたくないのと、あたしの顔を直視できないからかだろうか。
「……わ、分かった……わよ」
あたしもその隣で、同じように赤い顔、浴衣の柄の赤蜻蛉のような色をしているだろうか？　その顔で二人並んで、花火を見上げた。

この大会が終わったとき、あたしはさっきの言葉に返事をしなければいけないらしい。

けど、そんなの、考える必要もなく、決まっていた。

赤蜻蛉（後書き）

まず一つ、ありそうでなさそうな感じの恋愛ものを書きました。
作中の伝言とか、かなりの確率だと思うのです、書いといてなんですが。
この連作において重要なのは、文最初に書かれている時間です。これからも書かれるものと、時間を比べてご覧になってみてください。
それでは、

黄向日葵

ＰＭ６：１４……

「お兄ちゃん、どうかな？」

「うん、似合ってるよ、春歌」

「どうかな？　お兄ちゃん」

「春菜も似合ってるよ。２人共同じ浴衣なんだね」

姉さん達が学校等の用事で遅れる為、双子の妹、春歌と春菜を花火大会に連れていくことになった。

２人は昔からそっくりで、今もお揃いの———黄色いひまわり柄の浴衣を着ている。本当に似すぎてて親兄弟でもたまに分からなくなることがあるぐらいだ。

一応の区別の仕方は、髪を右側に結んでいるのが姉の春歌で、左側に結んでいるのが妹の春菜。人の名前を先に呼ぶのが春歌で、後に呼ぶのが春菜だ。

それらを混ぜられたら、もう誰も分からない。

「でも、まだ花火が始まるまで時間があるよ？」

花火の開始は８時から、まだ２時間以上あるのに二人は浴衣を着ていた。

「だって屋台見たいんだもん。ね、春歌？」

「そうだよ、花火だけが楽しみじゃないだもん。ね、春菜？」

あぁそうか。

「というわけでお兄ちゃん」

「さっそく行こ～」

ＰＭ６：３２……

家から歩くこと数十分、花火がよく見える場所に着いた。
それを示すように、多くの屋台が軒並み立ち並んでいる。毎年来ているけど、今年もとても賑やかだ。
「まずはどこを見るの？」
前を並んで歩く春歌と春菜に訊ねる。
「わたがし！」と春歌。
「りんご飴！」と春菜が答えた。
おや珍しい、二人の意見が別れた。
「じゃあ順番に行こうか」
「まずわたがし！」
「まずりんご飴！」
ここまで別れるとは本当に珍しいな。
「むむ」
「むー」
二人がにらみ合った。まるで鏡を見ている人を見ているようだ。
けど、二人は別に互いを怒っているわけではなかった。
「じゃあ同時に買いに行けばいいんだ！」
「そうだ！　同時に買いに行けばいいんだ！」
同時にって……
「じゃあ春歌はわたがしを！」
「春菜はりんご飴を買いに！」
決定したやいなや、二人は走り出して、春歌は右、春奈は左に曲がり、人ごみの中に消えていった。……って、二人とも見失っちゃった！
マズイ……二人の引率で来たのにいきなり離れ離れになってしまった。不幸なことに二人もバラバラだし。早く探しださないと。
二人の服装は覚えている。そして幸いなことに、二人が行く屋台は

分かっている。春歌はわたがしで春菜はりんご飴、その屋台がどこにあるか僕は知らないけど、それは二人も同じだ。
僕が先にその屋台を見つけられれば、おのずと二人も見つかるだろう。
花火が始まるまで、２時間弱、春歌と春菜探し開始だ。

ＰＭ６：４３……

いきおいよく走り出したのは良いけど、どこに売ってるのかぜんぜん分からない。
ここは、だれかに聞くのが良いかもしれない。
「すみません」
ちょうど目の前にいた、赤いとんぼの浴衣を着た女の人に聞いてみた。
「はい？」
「この辺りでわたがしの屋台見ませんでしたか？」
「わたがし……えぇ、見たわよ。もう何回も何回もここ回ってるからね……嫌でも覚えちゃったわ……」
「？」
何か疲れてるような顔をしている。何かあったのかな？
「だいじょうぶ、ですか？」
「え、えぇ、平気よ。わたがしは、この先言って右よ」
「ありがとうございます」
ぺこりと頭を下げてから教えてもらった方向へ走り出した。
目指すはわたがし、
春菜よりも早く。

ＰＭ６：４４……

いきおいよく走り出したのは良いけど、どこに売ってるのかぜんぜん分からない。
ここは、だれかに聞くのが良いかもしれない。
「すみません」
ちょうど目の前にいた、赤いとんぼの浴衣を着た女の人に聞いてみた。
「はい……って、あれ？　アナタ、今さっき向こうへ……」
「この辺りでりんご飴の屋台見ませんでしたか？」
「りんご飴？　さっきわたがしだったような……」
「？」
わたがし？　ひょっとして同じ人に尋ねたのかも。
「だいじょうぶ、ですか？」
「え……えぇ、うん、平気よ。りんご飴は、この先言って左よ」
「ありがとうございます」
ぺこりと頭を下げてから教えてもらった方向へ走り出した。
「きっと似た格好だっただけよね、浴衣と髪型と容姿が……って、それって似過ぎじゃ……」
目指すはりんご飴、
春歌よりも早く。

ＰＭ６：４６……

赤とんぼ柄の浴衣を着た女の人の教えてくれた方へ行くと、わたがしの屋台を発見しました。

「わたがしください」

お金を払い、わたがしを入手。

後は春菜よりも早く……

「あ……」

今になって気付いた。色々と走り回ったせいで、どこにお兄ちゃんがいるか分からない。

あの時はつい春菜と言い合って走り出したけど、後の集合場所を決めてなかった……

「ど、どうしよう……」

わたがしを持って辺りを見る。見たことのない人ばかりの中、一人ぼっちで……

「……」

さびしすぎて、泣きそうになる……けど、

「どうかしたのかい、お嬢ちゃん？」

「おじょう……？」

妙な呼ばれ方をして、顔を上げた。

目の前には女の人が立っていた。紫色の、はすの花の柄がついた、女の人だ。

「ふむふむ、どうやらお嬢ちゃんは迷い子さんみたいだね」

何も言ってないのに、女の人は当てた。

「親御さんかな？　それとも誰かお友達と来たとかかな？」

腰を曲げて同じ目線になって訊かれた。

「お、お兄ちゃんと……春菜と」

見ず知らずの人だったけど、つい答えてしまった。
「よし、お姉さんが探してあげよう」
胸をとん、と叩いて女の人は宣言した。
「お嬢ちゃん、お名前は？」
名前を訊かれて伸ばされた手を、
「は、春歌……」
わたがしを持ってない手でつかんだ。

ＰＭ６：４６……

赤とんぼ柄の浴衣を着た女の人の教えてくれた方へ行くと、りんご飴の屋台を発見しました。
「りんご飴ください」
お金を払い、りんご飴を入手。
後は春歌よりも早く……
「あ……」
今になって気付いた。色々と走り回ったせいで、どこにお兄ちゃんがいるか分からない。
あの時はつい春歌と言い合って走り出したけど、後の集合場所を決めてなかった……
「ど、どうしよう……」
りんご飴を持って辺りを見る。見たことのない人ばかりの中、一人ぼっちで……
「……」
さびしすぎて、泣きそうになる……けど、

「良かった、見つかった」
前を見ると、
「お兄ちゃん！」
「まったく、急に走り出すにしてもちゃんと集合場所を決めてからにしてよ」
「う、うん……ごめんなさい」
しゅんと頭を下げると、お兄ちゃんの手が置かれた。
「もういいよ、でも、次からは気をつけてね」
「うん……」
「さて……後は春歌だけど、この時間じゃもう屋台にはついてるだろうし……一応行ってみて、そこから地道に探すしかないかな。行くよ、春菜」
名前を呼ばれて伸ばされた手を、
「うん！」
りんご飴を持ってない手でつかんだ。

ＰＭ７：００……

「なるほどなるほど、春歌ちゃんと瓜二つの恰好をした女の子なのね」
「はい、双子の妹です」
お姉さんに手を引かれて、お兄ちゃんと春歌を探して歩く。けど、ぜんぜん見つからない。
「しっかし、これだけ歩いて見つからないもんだね～」
「はい……」

「大丈夫だよ春歌ちゃん。お姉さんが必ず見つけて…」
その時、
「あっちから誘っておいてなんのよもーーーーー！！」
とても大きな声が聞こえた。なんだか、聞き覚えのあるような……
「おおう？　今のはいったい何の声で……おや？」
お姉さんが立ち止まった。声がした方向を見ているみたい。
「どうしたんですか？」
「ふむふむ……なるほどね」
お姉さんは腰を曲げて同じ目線になる。
「春歌ちゃん、このまま真っ直ぐ進むといいよ。そうすれば、見つかるから」
「え？」
「お姉さん、ちょっと用事ができちゃったから、ここでバイバイするね」
「え、でもあの！？」
「大丈夫、お姉さんを信じて、真っ直ぐすすめ！」
ビシッ！　と前を指さすお姉さん。
「それじゃあね！」
ぽん、と頭を撫でられるとお姉さんは行ってしまった。あちらは確か、さっきの大声が聞こえた方向。
「……」
本当に行っちゃった……でも、ここで立ち止まってるわけにもいかない。
お姉さんの言った通り、このままっすぐ進んでみよう。
人の間を通って前へ、前へ、ただただまっすぐ歩いていく。
すると、

「春歌！」
名前を呼ぶ声、その先にはもちろん。
「春菜！」
走り出していた。春菜の隣にはお兄ちゃんもいる。2人は先に会ってたんだ。
「春歌……」
「春菜……」
ふと思い出して、春菜もぴたりと止まった。
「お兄ちゃん、これ持ってて」
お兄ちゃんにわたがしを渡す。
「はいはい」
「これ持ってて、お兄ちゃん」
春菜もお兄ちゃんにりんご飴を渡した。
「はいはい」
2人共両手が空いたところで、
「春菜！」
「春歌！」
2人して抱き合った。
「春菜にやっと会えた！」
「やっと春歌に会えた！」
「良かったよかった！」
「よかった良かった！」
ぐるぐるとまわり喜びを示しあう。
「良かったね二人とも」
お兄ちゃんに頭を置かれてぴたりと止まる。
「でも、今度からは急に走り出したりしないでね」
「はーい！」
「はーい！」

でも今は、二人に会えたことを喜ばないと！

ＰＭ７：５０……

無事に二人を見つけて、僕たちは河川敷にやってきた。ここは地元民のみが知る絶景のスポットで、屋台などが無い分、人は少なく花火がよく見える。

僕たちは他にも屋台で買い足した物を持って、姉さん達との合流地点に向かう。

「それにしても、二人があれだけ違う行動するなんて珍しいね」

手をつないで前を歩く二人に訊いてみた。

「うん、なんでだろう」

「なんでだろうね？」

二人は顔を見合わせて互いに訊く、どちらも理由がないらしい。

「いつもなら一緒のものを選んで一緒に買いに行ってたのに」

「なんでかな？」

「うーん、もしかして」

春菜が呟いた。

「――――――かもね」

小声過ぎて聞こえたかった。

「あ、そうかも」

春歌には聞こえたらしい。

「――――――かな」

「――――――だね」

二人がお互いに、僕には聞こえない声で納得しているけど、訊いた僕が分かってない。

「ちょっと春歌、春菜、僕にも教えてよ」

そう言うと、二人はこちらを向いて、
「お兄ちゃん、それはね……」
「それはね、お兄ちゃん……」

そして、その理由を教えてくれた。

黄向日葵（後書き）

二つ目の物語、投稿しました。
しかし、今日は8月の終わり……活動報告に8月内の終了を考えていましたが、出来そうにありません、すみませんでした。もう少しじかんがあれば……
さて、『黄向日葵』ですが、双子とその兄が主役です。双子は小学生低学年くらい、兄は中学生くらいですかね。この二人は自分の別作品の登場人物だったりします。その昔の話、という感じでここに参上いたしました。
これを読んだ後、一つ前二つ前を読むと、若干のつながりを見つけることができるかと思います。見つけてくだされば幸いです。

それでは、

青金魚

ＰＭ６：２９……

「……」

人が集まってきている。

家族で、恋人どうしで、そして……友達どうしで……

ただ、それを見るワタシは一人だけ。周りに人はいっぱいいるがそのどれにも属してないワタシは、一人で花火を見に来たのです。

何か言いたいなら言えばいいです。

一人で来たの？　大きなお世話です。

一人で浴衣着て花火を見に来て何が悪いというのですか。

ここには見受けられませんが、きっと私以外にも一人の人はいるはずです、かといってそんな見ず知らずの個人と一緒に花火を見る気はありませんが……

「あれ？　光希（みき）？」

急に名前を呼ばれました。学校でもワタシを名前で呼ぶ人はいない、唯一両親と姉、そしてもう一人……

「光希、だよな？　うわ久しぶりじゃん」

昔からくされ縁、高校でやっと離ればなれになれたと思っていた幼なじみだけです。

「……」

まぁ確かに中学卒業式以来会ってませんでしたが、かといって懐かしむ必要はありません。

なのでスルーで前に進みます。

「ちょ、無視はないだろ。オレだよ、覚えてない？」

しかし奴は諦めず隣に並んできました。

仕方ないので、

「お久しぶりです。さようなら」

それだけ言って加速、
「反応はしてくれたけどちょい待て！」
奴はツッコミと共に速度を合わせてきました。
そうそう、コイツはどちらと言えばツッコミでした。
「ひさびさに会ったのにつれないじゃんか」
「昔っからこうだっだと思いますが？」
「まぁそうだけど……」
「では」
更に加速、浴衣のせいでこれ以上の加速は不可能です。
「いやいやちょっと待てって」
あっさり追いつかれました。
「見た感じ一人だろ？　よかったらオレと回らない？」
「回るなら一人ですればいいです。右回りでも左回りでもご勝手に」
「いやそういう回るじゃなくてな？」
「一人で花火を見て何が悪いんですか？」
「でもそれ、寂しくね？」
「……」
寂しくは……ないです。
「寂しいわけないでしょう。こうして一人で来てるのですから」
「だよな……」
「……」
まったく、コイツは昔からそうでした。
「……着いて来るなら勝手にすればいいです。基本はムシしますが」
「そうさせてもらうよ」

ＰＭ６：３１……

人が賑わい、色々な柄の浴衣を着た人が歩いている。
赤い蜻蛉の柄の女の人、揃って黄色い向日葵柄の双子、ふむ。
「基本的に浴衣は女の人が多いようです」
「そういうお前も浴衣じゃん」
まだいましたか。
「というか人の心を勝手に読むんじゃないです」
「いやいや声に出てたぞ？」
そういえば出していたかもしれません。
「その浴衣、昔と同じだよな？」
今ワタシが着ているのは、青地に金魚の柄がついた浴衣。裾を上げていた昔の物を今は上げずそのままで着ています。
「まだ着れるのだから当たり前です」
「ふうん、やっぱ似合うなその浴衣」
「……」
まあ昔は姉さんも含め3人で回ったこともありましたが。小学生頃の話です。
「そういえば、沙紀さんと一緒じゃないんだな？」
「今更気づきましたか。今年は姉さん、井沢さん達と回ると言ってましたです」
「そこに混ざらないのか？」
「年上に囲まれていては息苦しいに決まってるのです。そんなことも分からないですか」
「普通分からないと思うけど……」
「やれやれ、これだから――――は」
「ん？　これだからなんだって？」
「さて、次はあっちの方に行ってみるです」
「おぅい！　ここでいきなり無視かよ！」
なんか声が聞こえるような気がしますが、先ほど基本はムシすると言っておいたはずです。

ＰＭ６：４５……

結局、どれだけムシしてもアイツはついてきますです。いったい何が面白くてワタシについてくるのですか。

「全く……」

一人で楽しもうと思っていた計画が台無しです。わざわざ姉さんの誘いを断ってきたというのに……

……一人で歩いていれば、ひょっとしたら、地域が同じだから、少なからず可能性が……

「なにを悩んでいるのだい、青い金魚のお嬢さん？」

いきなり声を掛けられました。多分浴衣の柄からワタシのことでしょう。

声の主はワタシの隣にいました。紫色の蓮華の花柄の浴衣を着た女の人です。

「ストーカーに追われています」

「ありゃ、意外に冷静。も少し驚いてくれるとお姉さん助かったのに」

「だからどうしたんですか？」

「ふむふむ、なら少しの間だけ姿を隠してあげよう」

女の人はワタシの後ろに立ちました。多分アイツから見えなくしているのでしょうが、多分見えているです。

「時にお嬢ちゃん、彼に伝えたいこと、あるんじゃないかい？」

「……」

なぜそれを……また声に出てたですか？

「ならいいところがあるよ、河川敷の方は人が少なくてね、そうい

う人が多いのさ」
「……」
この人、分かってて言ってるのですか……？
「あなたはいったい……」
「むむ！　あそこに迷子っぽい女の子発見！」
女の人は急に走りだして行ってしまいました。
「……」
河川敷……ですか……

ＰＭ６：５９……

ワタシは河川敷に着ました。
「なるほど、ここなら花火よく見えるもんな」
アイツもついてきたです。
「全く……なんでここまでついてくるんです？　一人計画が実行できなかったじゃないですか」
「え……そ、そりゃあ……」
なぜかアイツは、目をそむけました。
「――だから、かな」
「……」
まあ予想はしていたです。
中学生となれば、普通同性でつるむものですが、アイツはよくワタシといました。
そうする理由は幼なじみ以外には……そうしかないでしょう。
はなればなれになってもとは、執念深いとはコイツのことを言うのです。

「……わかりましたです」
ワタシはアイツを正面に見ました。アイツもこちらを向いています。
「じゃ、じゃあ……」
「えぇ、今日から――――――です」
「……は？」
予想外の答えに、アイツは首をかしげました。
「だから、――――――です。意義は認めません」
それだけ言って回れ右、歩き出しました。
「ちょ、どういう意味だよ！」
「意義は認めないといいましたです」
「だからって……」
「いいではないですか、――――――。深く考えてみるといいです」
「まぁ……そうか……そうかもな」
「ではいいですね、――――――で」
「あぁ、まぁ……いいや、うん……」
若干納得できてないようですが、まあそれでいいです。

いつか、こっちから言ってやるのですから。

青金魚（後書き）

三作目投稿いたしました。
今までに書いたようなそうでないような、そんな感じの主人公目線のお話となっています。
実はこの人物、自分の別作品登場人物の妹です。なんの作品かは、分かる方には分かるかと思います。多少ヒントも出ていましたので。

この作品、後2、3作で終了を予定していますのが、いったいいつになるかは不明です。もしも読んでいる方がいましたら、お待ちください。

それでは、

黒躑躅

ＰＭ６：０１……

「ふっふっふっ……」

ついに、今年もこの時がやって来た。

今月に入ってから、どれだけこの日を待ちわびたか！

「ふぁーーはっはっはっ！」

思わず高笑いしてしまった。しかし周りはそんなの気にしないのでノープロブレム。問題無し。

さて、そろそろ行くとしようか……

毎年のように得ている称号、夏祭りの制覇者の名を取りに！

ＰＭ６：０９……

まずは小手調べ、一番簡単なものから攻めるか。

この時の為に一年寝かせておいた勝負服――――白い布地に、黒で躑躅の柄が描かれた浴衣――――に身を包んだあーし、まず最初のターゲットは……

「わたあめひとぉつ！」

「はいよー、って、おぅ！　嬢ちゃんじゃねぇか」

「久しいなおっちゃん、今年もわたあめ屋か」

「まぁな、ここ数年はずっとさ」

「だな、来てるから知ってるぞ」

「ははっ、そりゃそうだな、ほれ、わたあめ」

「サンキュー」

「よかったらまた後で寄ってくれよ」
「おぅよ、必ず帰り前によるぜ」
わたあめを貰い、あーしは次の目標に向かった。

ＰＭ７：００……

さて、そろそろ食べ物は一周したか。
腹もこなれた。いよいよ本題に入るとしよう。
まずは一番に目に入った……
「射的いっかぁい！」
「あいよ！　ってお嬢！　久しぶりだね」
「まあな」
射的銃を受け取る。一回、コルクは六個だ。
「今回一番難しいのは？」
「ふふふ、そういうと思ってね……あれを見よ！」
指を差される方を見ると、棚の一番上、しかもど真ん中に、金色に塗られた板に、赤い的がついていた。
普通に見れば、ただの的だ。だが、その大きさは、
「ちょうどコルク一個分の大きさの板。もしもあれに三つ当てることが出来たら、ここにある商品のどれかをプレゼントしているのさ！」
「ほほぅ……」
これはこれは、あーしに対する挑戦状以外の何物でもないね。
「受けてたとうじゃないか！」

ＰＭ７：４４……

「ふっふっふっ……」

射的も、輪投げも、金魚すくいまで、全ておそるるに足らなかったな。

仕方ないさ、あーしは七年連続、この夏祭りの制覇者なのだから！

「ふぁーーはっはっはっ！」

高笑いもよく響く。

「ふーはっはっはっ！」

何故か重なって聞こえるような……ん？　重なって？

「どうかしたのかいお嬢ちゃん？」

真横に女の人がいた、紫色の蓮華柄の浴衣を着ている。

「ただの高笑いだ」

「なぜに高笑い？」

「あーしは夏祭りの制覇者になったからだ」

「なぬ？　制覇者？」

「そうだ、今年もまただ」

「ふーん……」

何だ？　妙に怪訝顔だな。

「文句があるのか？」

「いんや、たださ、お嬢ちゃん……もう…」

「ああ！　しまった！」

「おおう！？」

「まだやってないものがあった！　早く行かなくては、制覇者を名乗れない！」

あーしは走り出した。

もちろん、本当にやってないものがあるのだが。
それ以前に、あの先を聞いてはいけない気がした。

ＰＭ７：５８……

ふむ、堪能した。
やり残しもない、その為に同じ場所を二度は回った。
皆あーしを見て、またな、と言ってくれた。
今回はまた、浴衣の人物を多く見たな、さすが夏祭りか。
この一週間で一番多く見た、当たり前か。夏祭りなのだから。
そうして、今年もまた夏祭りの制覇者の座を獲得できた。

それに……アイツらにも、会わなかった。

……毎年、会えなくて悲しくもあるが、会えなくてよかったとも思うんだ。
会えば喜べるだろう、それと同時に悲しみも込み上げてくるが。
なぜなら、あーしは――――――

ドーーーーーーーーーーーーン！！

夏祭りのメイン。花火の打ち上げが始まった。
「……」
……そろそろ、最後の目的地に行くとするか。

ＰＭ８：５７……

やはり、最後はここだ。というか、ここに来ないと行けないんだ。
「ふむ……」
回りには人だかり、それはそうだ。この河川敷は花火の絶景スポットだからな。
その河川敷の端っこに、あーしは用がある。
「よう、また見に来てやったぞ」
河原に無造作のように積まれた石。その前には、
「ん？　他にも誰か来たようだな？」
屋台で買っただろう食べ物を少しずつ―――たこ焼き一個とかわたあめ一口分とか―――が皿の上に置かれている。
「ほぉ……豪勢だな」
だがなコレを置いた誰か、さすがに食いきれないだろう。
「しかし……」
いつ見ても、これは妙な光景だろうな。

なにせ、自分の墓を自分で見ているのだから。

毎年毎年、花火大会が始まる一週間前から、花火が全て終わるまで、あーしはここに現れていられる。

神のきまぐれかとてつもない怨念か、あるいは何か特別な力のせいか、とりあえず、あーしはいれる。

生きているように、体は透けるが、歩き、話せ、見れる。普通の人と対して変わりない行動が出来る。

もちろん、相手にも見られる。始めてこうなった時に会いに行ったら、それはもう、かなり驚かれた。

事情を話すと皆あっさり受け入れてくれ、それ以来は金が無いので色々タダでもらえるようになった。

それからは、一年に一週間だけ、楽しみはこの花火大会。要はそれを大いに楽しむことだけを考えた。

毎年訪れ、全ての屋台を制覇、食べ物をもらい、射的とかは当てる

だけ、どうせ持っていけないから。
そんなのがもう、かれこれ七年くらいか、あーしがここで亡くなった時から、もう七年も経ったから。

「……ふ」
毎年来ては居る。普通の人より歩き回っているだろう。
だが、必ずアイツらには会わない――――いや、会えないだな。
おそらく、アイツらにだけは見えてないのだろう。
そう、願いたい。
きっと、アイツらに会って、話をして、あの時のように花火大会を回ったら。
もう、制覇者にはなれないだろうから。
だから、毎年来ているというこの形だけを見て、花火を全て見て、
また一年後まで、ここではない場所へと行く。それがあーしになってからの、七年。

今、最後の花火群が上がりだした。毎年同じで、もう後ろを向いていても分かるぐらいだ。
一際大きな花火達が、夜空を彩る。
赤、黄、青、さまざま色とりどり、夜空の黒を明るく照らす。

そして、一際大きな尾を残しながら空高く昇っていく、最後の一発。
さながらそれは、あーしが昇っていくため空を貫く紐ように、

伸びて、伸びて、伸びて――――――――

最後の大輪の花が咲いて、

「――――――、だ」

空に暗闇が戻る時、河川敷の人々が帰路につき始めた時に、

誰もいない河原の端に積まれた石に近づく、一組の男女がいた。

黒躑躅（後書き）

４作目……かなり変わった物語となっています。
今までののはどこかにつながりがあった、けれどこれはそうではなく、しかし作品に出てくるある人物との関わりがある。そんな話になっております。

これを投稿した、ちょうど二時間後にエピローグを投稿します。
そこで知らされること、残る疑問。そして終わり。できればご覧になってください。

それでは、

開始の3分前

「いやいや～お待たせお待たせ」

「そんなに待ってませんよ」

「あれ？　こんなやり方さっきやったね？」

「はい、ちょうど三時間くらい前に」

「そいやそうだったね。さて、お互いの数を公開しようじゃないか！」

「先輩はどのくらいですか？」

「ふっふっふっ……聞いて驚け！　なんと3人！」

「さすがですね、先輩」

「はっはっはっ、では、鏡八くんはどうだったのかな？」

「……それがですね、先輩」

「ん？」

「結果、ゼロです」

「マジか！？」

「はい」

「おおぅ……まさか鏡八くんがゼロとは、あたしより出来そうなのに」

「先輩には勝てませんよ」

「だとしても！　まさかのゼロ！　いったいなにをしていたんだい！？」

「それはですね……」

「うむ、それは？」

「……花火大会が終わる頃、お話ししますよ」

「へ？　何故今ダメ？」

「会ってしまうんですよ。会ってはいけない、会ったら会えなくなってしまうかもしれない人に」

「ん？　んん？　なにを言ってるんだい鏡八くん？」

「さすがに、コレばかりは時間を決めて話さないといけないことなので、すみません」

「いやいや、話してくれるなら別に良いのさ、ただ、鏡八くんには珍しいなと思って」

「そう、ですね……」

「ふっふっふっ、また一つ、鏡八くんの秘密を我が手に！」

「あ、始まりますよ」

「おおぅ、華麗なスルー。さすが鏡八くん」

「ありがとうございます」

「終わったら話してもらうかんね？」

「はい、その時には、一緒に行きましょう」

開始の3分前（後書き）

予想以上の時間がかかってしまいました『イロイロ花火』ここに完結します。
楽しんでいただけたでしょうか？　楽しんでいただければ幸いです。
それぞれが別の作品の登場人物、それが一つの目的に集い、いつまにかすれ違っている。そういう話になっております。

作品の中に、あえてセリフを入れていないな場所が数か所ありますが、それはあえて、読んでくださった方に考えていただければ、と思います。

それでは、

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0601w/

イロイロ花火

2011年11月12日02時02分発行